

エッセイスト 近藤 節夫



モヘンジョダロ古代遺跡の重層化された井戸

今夏大洪水に見舞われた世界文化遺産モヘンジョダロが、9月には史上最悪の大洪水に襲われ国土の1/3が浸水し、都市遺跡が大きく損壊した。

モヘンジョダロは、現地の言葉で「死の丘」を意味し、現地人も近寄りがたい謎の多い古代都市国家である。パキスタン南部の大河インダス沿岸に繁栄した世界4大文明のひとつで、今日に残る遺跡の勃興期は、紀元前2500年から同1800年ごろと言われ、往時には4万人の人々が住んでいた。

この大河インダス流域では古来よりその恩恵を受けながらも、度々大洪水に浸食され、遺跡が損壊され、今日残っている遺跡は繁栄期のそれに比べると大分規模は小さい。しかし、この遺跡が他の古代都市と奇跡的に異なるのは、過去に7度もインダス川の大洪水により滅んだ都市遺跡の上に新たな都市を築いて、珍しく遺跡自体が重層構造となっていることである。重層の井戸などは、大きな煙突のように現在の地上より高いまま残っている。最下層の遺跡より下の部分には、更に昔の都市が埋まっている可能性もあると考えられている。

自然災害により昔の都市がその姿を失いつつある中で、現存する遺跡には必見の価値がある。その先進的都市計画は、現代の建築家も舌を巻く測量など高い技術水準が窺がえる。街は整然と区画整理され、今日の世界的大都市ですら充分整備されていない下水道や、汚水処理施設などが完備されていたことが分かっている。現在残された広い遺跡群は、昔の都市計画及び道路区画が整然と行われた結果、都市の形状を今に留めている。

この世界遺産の素晴らしいことは、普通なら価値ある古代遺跡と言え、そう簡単に身体で直に触れることはできないが、ここでは廃墟へ入り込み古代都市の狭い路地を歩きながら直接古代史に手で触れて実感できることである。過去と未来を宇宙的スケールで考えさせられる謎多き貴重な世界遺産である。